

## 研究ノート

## 『鐘』における聖と俗 — ドーラとマイケルに託された役割

中 窪 靖

## 序 ドーラ・グリーンフィールドとマイケル・ミード

アイリス・マードックの4つ目の作品『鐘』は、彼女の作家人生の始まりの最初の5作、あるいは、1950年代で区切ると4作、の中で秀逸の作品と言われている。ヒルダ・スピアが言うように、三人称の小説である。三人称の語り手が、ドーラの人生を簡単に概観する。彼女は6カ月間家出をしていたが、夫婦仲の悪い夫の元に戻ることを決意したのである。第1章は、ドーラの視点から描かれる。彼女は夫の支配を受けて、夫に服従せざるを得ない状況にある。性格の合わない夫との結婚が彼女の人生の足かせとなっており、彼女は今そこから逃れたいと思っている。夫のポールは、彼女をナイツブリッジの自宅の収集品の一つと考えている。物語の冒頭、ドーラは、おぼろげながら自分の人生の盛りが過ぎてしまったと考えているが、その後、インバー・コートに赴きトビーを知るようになると、若い彼の姿に彼女の自由を見るようになる<sup>1)</sup>。A. S. バイヤットの指摘するように、物語の結末では、彼女は彼女のことをものとしてしか考えない夫の元を去り、かつて勉強していた絵画の世界の戻ることを決意する<sup>2)</sup>。

このように冒頭では、ドーラと夫のポールとの性格の不一致、価値観の違いが強調されている。そこには、夫との年の差が一回りほど違うことが大きな要因となっているのかもしれない。そして彼女は、物語の舞台であるインバー・コートの宗教的な雰囲気には馴染まない人物で

ある。

一方、マイケルは、彼が同性愛的な気質をもっていることはさておき、彼はかつて司祭になることを考えていたほどに、宗教的な世界にいることを強く願っている。その一方で、彼はパブリックールの教師をしていた時に、生徒と同性愛者として関係をもって教師の職を失っている。彼がインバー・コートに来たのは、表向きは彼の一族が所有するこの施設を管理することが第一の目的ではあるが、もともと、彼の中に宗教的な世界に救いを求めるところがあるからであろう。プラトンの言う善や、カントの道徳哲学の中にある良きことの本質を知りたいと思ったのでであろう。ヒルダ・スピアは、作品『鐘』の中の精神性に最も強く影響されるのはマイケルであると指摘する。ニックに対して同性愛的な感情を抱き、その感情にニックを巻き込んだことは、彼が神の愛に癒されるという機会を奪ってしまう。彼がインバー・コートで平信徒協働会を設立したことは、彼を現実から遠ざけているだけで、彼は、教師になることも牧師になることも許されることはない (Spear, 31)。マイケルが自身が同性愛者であることを意識しないときには、彼はその気質ゆえの問題を引き起こす可能性を秘めていると、A. S. バイヤットは指摘する (Byatt, 105)。

こうした2人の人物は、一見するとドーラが「俗」を、そして、マイケルが「聖」を表していると考えられるが、逆の立場になっているとする批評もある。この拙論では、表向きの「俗」と「聖」だけではなく、その逆のケースを明ら

かにしつつ、作者マードックによる二人の人物に託された役割について考えていきたい。

## 第1章 ドーラがノアール・スペンスの元を離れるまで

ドーラは夫の元に戻るが、すぐさま、彼の持っている性格は変わってはいないし、それゆえ、彼女は夫との相容れない部分があるという思いを強くする。また、彼女は、インバー・コートのような場所は、その宗教性ゆえに彼女の性格からは一番遠いところにある。それは、彼女が俗の世界を代表する人物であることに他ならない。ドーラは宗教とは縁のない人物設定となっているとの指摘がある。A. S. バイヤットは言う。そのような女性が美術史家の夫を媒介して、インバー・コートという宗教的な場所に行き、そこから彼女自身が意識することがないままに、そこにはなくてはならない人物へと成長するのだと。ところが、マイケルの方は、宗教的な雰囲気インバー・コートから、いわゆる成長をすることはない (Byatt, 93)。

我々読者が最初に出逢うドーラは、彼女自身の気持ちを御しかねている。自分の周りにいる男性よりもはるかに彼女のことを受け入れてくれる器の大きさを感じて結婚したものの、実際は彼女のことを収集品の一つとしてしか扱おうとしない夫と一緒にいることに嫌気がさして、彼女は家出をした。ところが、美術史家としてグロースターシャーの田舎の僧院で調査をしている夫から忘れ物を届けるように求められたとき、彼女は夫の変化を期待してしまう。暴力的な夫が彼女に優しく接することを期待しながら、パディントン駅から列車に乗ってインバーコートへと向かう。物語は、ドーラが列車でたまたま乗り合わせた二人の男性との間に、その後の物語の伏線を用意する。その後、彼女にとっ

ては、自由の権化となる若いトビー・ガッシュと、一つの社会勉強として彼に宗教的な体験を持たせようとするジェイムズ・テイパー・ペイスという牧師との出会いがある。彼女は、窮屈で蒸し暑い車内で所在のない思いにとらわれる。そして、パディントン駅まで自分を迎えて来てくれると想像した彼女自身の予測が外れたことと、そのことで再び夫への不満を募らせることが相乗効果となって、彼女は不満と不安とが入り混じった気持の中にいる。

彼女は、結婚してあまり時間もたたないうちに、ポールとの結婚生活から逃げ出すという行為を数回繰り返している。今は、新聞記者をしているノアール・スペンスの元に身を寄せている。彼女自身は、物語の早い時期から、夫との結婚生活を続けられないと思っている。

That Paul was a violent man had been clear to Dora from the start. Indeed it was one of the things which had attracted her to him.... She had liked to see in him something taut and a little ruthless, especially when he had been at her feet. ... Yet now she began to see his power with a difference. She was at last disturbed by the violent and predatory gestures with which he destroyed the rhythms of her self-surrender. Something gentle and gay had gone out of her life.<sup>3)</sup>

ローラは述懐する。夫のポールが乱暴な人間であることは、結婚する前から判っていたことだ。結婚する前に彼女は、ポールが他の同世代の男性にはない大人の魅力を備えていると思いついたが、ポールの魅力と思っていたものが、最初に気づくことができた「何か暴力的な気質」

以外の何物でもなかったことが、今の彼女には判っている。

## 第2章 ドーラがインバー・コートで成長していくこと — トビー、あるいはマイケルと関わりあう中で

ドーラの出した結論は、夫の元には決して帰らないというものではなかった。彼女はいくばかりの夫の変化を期待して、夫の忘れ物を届けるために、ポールの研究調査をしているインバー・コートへ向かう。しかしながら、ドーラはいまだこのまま夫の側にい続けるべきかどうか決めかねている。このようなドーラを知る読者には、彼女が宗教的な雰囲気の色濃く漂っているインバー・コートに適応できるとは思えない。

案の定、インバー・コートでのドーラは、マーク夫人からその場の案内を受けるとき、彼女にとってはその場の日常に違和感を感じていることを表明する。修道女の生活は、彼女の日常とは正反対の清貧に甘んじる生活である。しかしながら、こうした異世界での生活の中にも、ドーラが見つげだす彼女と共通の世界に生きる人物がいた。それが、トビーとマイケルである。

ドーラとトビーとの関わりは、物語のタイトルにもなっている「鐘」を媒介に強くなっていく。ある日、湖で泳いでいたトビーは、底に沈んでいる鐘を見つける。そして、この鐘は、修道院の言い伝えによると、修道女がある男性と密会していることが発覚し、それを司教が咎めようとしたが、誰も名乗り出るものがなかったため、その司教が鐘に呪いをかけて湖に沈めてしまったとの謂れのある鐘だということが判り、二人はそれを引き上げることを画策する。この言い伝えをドーラに伝えるのは、その謂れの書いた古文書を見つけた夫のポールである。

トビーはこのインバー・コートには、ジェームズという聖職者の勧めで彼に連れられてやって来たという経緯がある。秋には、オクスフォード大学に入学する彼が、その前に宗教的な空気に触れる機会を得るために、ここにやって来たのである。実は、このトビーとその後見人のような役割のジェームズとは、ドーラはすでに物語の冒頭の列車で移動する場面で、向かい同士の座席に座ることになり、すでに面識がある。

一方、マイケルという人物については、インバー・コートで初めて出会う人物であるが、彼を媒介するのは、ジェームズである。

湖に沈む鐘については、ドーラとトビーは、新しく届けられる鐘とそれとをすり替えることを画策しある程度彼らの思い通りに事が運ぶが、予想外の結果として、新しい鐘が湖に沈んでしまう。

さて、ドーラとマイケルとのかかわりであるが、最初は別段親しくなるわけでもない。ある距離を置いた関係が続く。しかし、ふたりの関係は、それは男女の関係には発展しないが、結末に至った時、ふたりは物語の重要な人物となっている。マイケルは、インバー・コートに平信徒協働会を立ち上げるに際して、それが修道院長の考えであったとしても、その場所を提供する人物である。もちろん、彼自身が平信徒協働会を運営しているわけではない。彼のインバー・コートでの立ち位置は、むしろ彼がインバー・コートに流れ着いたこれまでの彼の人生によって形作られている。若い頃から、自分自身が同性愛者であることを自覚していたが、最初にそれによって彼の人生が大きな帰路に立たされるのは、パブリックスクールの教師をしているときであった。プラトニックであったものの、当時その学校の生徒だったニック・フォーリーと互いに好意を寄せる間柄となっていた。理由は明確に描かれませんが、ある時ニックが校

長に、教師のマイケルとの関係を暴露したことで、マイケルは学校にいたことができなくなる。『鐘』という作品がマイケルを読者に紹介するときには、この事件はマイケルにとって過去のこととなっている。インバー・コートで再起を図るマイケルの前に、ニックが再び現れる。ニックは無意識にマイケルからの理解を求め、マイケルはニックのことを理解して受け止めることができないままに終わる。

トビーがドーラに対して一番大きな影響を及ぼすのは、湖に沈んでいるのを見つけた鐘を引き上げるといふ彼の行動である。しかしながら、トビーはドーラに対しては、さほど大きな役割を果たしているわけではない。

### 第3章 マイケル・ミードの聖と俗 — マイケルを造形するために、その前提となったこと

マイケル・ミードは、この物語の中で、ドーラとは対極にいる。彼は、この作品の発表当時には、人々の意識の中ではいまだ許容されていない同性愛者として、人物設定がされている。

1999年2月にマードックが亡くなり、そして21世紀も20年が経過した今、マードック研究は新たな方向に向かっているようだ。2019年に出版された著作 *Iris Murdoch* において、アン・ロウは次のように述べている<sup>4)</sup>。2001年出版のコンラディの書いた自伝はマードックの人となり、哲学者であり小説家であるすぐれた作家と称する一方で、彼女の私生活を暴露するような内容であったため、その中では、マードックは性の上で放縦な人物というレッテルを張られる始末である。また、2015年に発刊された数百本もの個人的な手紙も、その流れを助長することとなった。彼女の私生活を彩った、男女を問わない恋愛関係は、マードックをス

キャンダルの対象にしてしまったのかもしれない。

... The complex and conflicted woman who emerges out of the candid memories of those who loved her, and the unguarded xdomain, reveal a personality quite unlike that claimed by either the academic during her life, or the tabloid after her death. This reconfiguring of Murdoch's identity has revealed her as 'different': intellectually, emotionally, and sexually. Her letters confirm that she was not only progressive in her advocacy of free thought and complete emotional and sexual freedoms, but also conflicted in her personal experience of gender as fluid and not fixed: 'I am probably not at all normal sexually', she wrote to Georg Kreisel in 1967. 'I think I am sexually rather odd, which is a male homosexual in female guise' ... (Anne Rowe, 4)

彼女の書いた手紙の中に現れているように、マードックは、感情と性の自由に関して、既成の概念にとらわれないところがあっただけでなく、彼女自身の人生の中で自身の性別がある時は女として、ある時は男として、感じ取ることができたのである。マードックは手紙の中で、自分の性認識が特異だとして、「女の身体をもった、男性の同性愛者である」と述べている。まさに、21世紀の今は、性認識と性行動に対して多様性を求める時代であるので、今後のマードック研究は、新しい方向に向かう可能性を秘めている。

そうした観点からは、マイケル・ミードが、

いつまでも同性愛的な感情が消えない人物と設定されているのは、あながち特異なことではない。

... And a level of contrived emotional intensity was as natural to Murdoch as the authentic pain of the agonized longing she experienced for lovers such as the French experimental writer, Raymond Queneau, and the Bulgarian polymath, Elias Canetti. But all such experiences, along with biting remorse for the pain she caused others, provided emotional fodder for her art, and flow into her complex and utterly recognizable portrait of what it means to be human. (*Anne Rowe*, 5)

マードックにとっては、ある基準に合わせて作られた感情の強調は、彼女が実際に抱いた、クノーやカネッティへの憧れの中で感じられた苦悶と同じくらい自然なのである。そうした感情が、マイケル・ミードという人物造形に結び付いたのであろう。しかしながら、ロウが言うように、作品成立の1950年代においては、同性愛はイギリスでは認められていない。その意味では、それを作品の中に入れ込んだマードックは、極めて新しい、時代の先を見据えたような慧眼があったと言えるであろう (*Anne Rowe*,14)。

マイケルは、もともと彼の一族の所有であるインバー・コートに、聖職者以外の人々がキリスト教の教えに浸る場所として開放する。それは、隣接している修道院の修道院長との話し合いの中で実現したものである。彼は昔、自身の勤務するパブリックスクールの男子生徒と同性愛の関係を結び、そのことが学校の校長の耳に入っ

たことで教師をやめざるを得なくなった過去を持っている。そのことを知っている読者は、彼のそうした気質が問題を引き起こす引き金となるであろうことを予測している。そして、彼はかつての同性愛的な感情を通わせたニックと再会した後、運命は悪い方向に進む。ニックは、物語の最後で自ら命をたってしまう。ニックに死を選ばせたマイケルは、一体全体どのような心の動きを示すのであろうか。

そもそも、マイケルがインバー・コートにいるのは、彼の一族の所有の建物であったからである。彼が、紆余曲折の人生を経て到達したのは、以前から関心のあった宗教的な雰囲気の中に身を置くことであった。彼の中でその準備ができるまでは、足を踏み入れるべきではない場所として、インバー・コートは存在していた。マイケルが複雑な人物であることの一部は、以下の箇所が示してくれる。

... Michael, who had always been profoundly attracted by the place, avoided it for this reason. He hardly ever went there, and retained only a vague conception of the house and the estate. As a younger man he had intended to become a priest, but had failed to do so, and had spent a number of years as a schoolmaster. Although he had kept his sense of a religious vocation he had never until very recently made any visit to Imber Abbey; the taboo which rested for him upon the Court had included the Abbey also. It now seemed to him, looking back, as if this ground had been kept sacred, forbidden to him until the time when it should be the scene of decisive changes in his life. ... (*The Bell*,

80)

マイケルのパブリックスクール時代の経験を考慮すると、彼のいう「その準備ができるまで」という言葉は大きな意味をもつだろう。修道院長の依頼があったことは、彼の人生の次のステップとして、運命が彼をインバー・コートに導いたのであろう。一方で、彼が認識しているように、同性愛者であることはキリスト教に帰依する聖職者としてはあってはならないことである。ここには、彼が複雑な状況に置かれていることが判る。そこに、ニックが妹の進めでやってくることとなり、運命の歯車が複雑な方向に向かうのである。

During this time Michael remained, as he had since his confirmation, a somewhat emotional and irregular member of the Anglican church. It scarcely occurred to him that his religion could establish any quarrel with his sexual habits. Indeed, in some curious way the emotion which fed both arose deeply from the same source, and some vague awareness of this kept him from a more minute reflection. Toward the end of his student days, however, when the conception of perhaps becoming a priest took shape with more reality in his mind, Michael awoke to the inconsistencies of his position. He had been an occasional communicant. It now seemed to him fantastic that he could, in the circumstances, have come to approach the communion table. He did not, for the moment, alter the mode of his friendships, but he ceased to receive the

sacrament and went through a time of considerable distress, during which he continued rather hopelessly to do what he now felt the most dreadful guilt for doing. ... (*The Bell*, 99-100)

マイケル・ミードは、彼の思春期の頃から、自分が同性愛であることを意識してきた。彼が最初にそれに気が付いたのは、14歳の時であった。学生時代の終り頃には、聖職に就きたいという思いが強く感じられるようになった。しかし、同性愛者でありながら聖餐台に近づけるといことが異様であるという思いに捉われ、聖職者の助けを求めることがあり、最終的には、同性愛は悪徳であると認めながら、一方では、自身が宗教の世界に身を置くことに正当性を与えるようになった。そうした時期に、パブリックスクールで教員を始めた頃に、マイケルはその学校の生徒としてニックと出会った。ニックとの間に、プラトニックな心が通じ合う同性愛的な感情が生まれた。マイケルは、このようなかつての経験から「学ぶ」ことができない。彼は、インバーコートという極めて宗教色の濃い世界で、再び彼の性向をさらけ出すこととなる。トビーという青年に対して、発作的にキスをしてしまう。これは、ニックとトビーとの争いに発展する。マイケルを媒介として、ニックとトビーは対峙する。ニックにはマイケルに対する憤り、それは愛情と置き換えられるかもしれないが、その気持ちゆえに、トビーと敵対する。こうした事件を引き起こす要因として、偶然妹が修道女になるべくインバー・コートにいるニックは、ここでマイケルと再会したことは重い意味を持っている。ニックは、最後には死を選ぶからである。

エリザベス・ディプルは、マイケルが同じ過ちを繰り返すことを指摘しているし<sup>5)</sup>、一方、

バイアットは、物語の中のドーラとマイケルは自己の限界と自己の現実を探求するというが、ドーラについては、マイケルと対照的に、「自由を紡ぎ出すことができる人物」と言及している (Byatt, 81, 93)。さらに、マイルズ・リーソンは、この作品を、ソクラテスになぞらえて「本物の知を獲得する物語である」と説明している<sup>6)</sup>。

#### 第4章 俗の世界のドーラと聖の世界のマイケル — 二人が交差するところ

物語の最終章である第26章は、物語の総まとめのような構成となっている。以下は、ドーラが「独り立ちする」ことを暗に宣言している箇所である。

... She imagined, as she imagined every night, Paul sitting alone in his beautiful Knightsbridge room, beside the white telephone, wanting her back. But her last remembrance was that on the morrow Michael would be leaving her, ...

'Have you got a winter coat?' said Michael.

'No. Well, it's at Knightsbridge,' said Dora. 'It doesn't matter. I'm not a cold person.'...

'I hope it[my train] won't be too late,' said Michael. 'Margaret's meeting me at Paddington.' He sighed deeply.

Dora sighed too. She said, 'You packed my pictures all right?' She had given him three of her sketches of Imber.

'They're flat on the bottom of my case,' said Michael. 'I do like them so much. I'll have them framed in London.' (*The*

*Bell*, 312)

インバー・コートに最後まで残るのは、ドーラである。今、まさに、マイケルが立ち去ろうとしている。ドーラとマイケルは、物語の最後でほとんどの登場人物が舞台から消えた後も、とどまり続ける。この二人は、この物語の中で、物語の幕を引く役割を任っているようである。

ここで、ドーラがこのような心境に至るまでの出来事を振り返っておかねばならない。彼女は、最初インバー・コートを訪れたときには強い違和感を覚えたが、次第に俗なる世界から聖なる世界に足を踏み入れるようになった。ドーラは、鐘を巡るトビーとの出来事、キャサリンの自殺未遂、そして彼女の兄ニックの自殺を経て、別な人間になったのである。

マイケルは、鐘を巡りインバー・コートを混乱に陥れたことの後始末をする。こわれた橋脚の修理を手配し、湖に落ちた新しい鐘の引き上げの依頼をする。そして、信仰会が解散したあとの残務処理も彼に託された。そして、ニックの妹のキャサリンがとった湖に入水するという事件を思い出しながら、キャサリンが彼に好意を持っていたことを知り、彼女への配慮が足りなかったことを反省する。彼は、ニックのことを尼僧院長にすべて打ち明けた。良心の呵責を感じながらも、次第に彼自身のキリスト教への対峙の仕方に気がついていく。「神は存在する、しかしわたしは神を信じない。there is a God, but I do not believe in Him. (*The Bell*, 308)」という認識の中、ロンドンで再びパブリックスクールの教師となる道を選ぶ。そうした中で、ドーラはもはや夫の元に帰らないことを選択する。彼女の恋人のところに戻ることなく、マイケルの示唆もあり、昔のように絵の勉強を続けるためのパースに向かう。その直前、ひとり湖にボートを漕ぎだしたドーラは、生まれ変わった

たという自覚と同時に自由を感じる。

最後に、物語の始まりに近い箇所に戻ってみる。マイケルの盟友のジェイムズは次のような法話をしている。のちに、トビーの口からマイケルのキスのことを聞かされるジェイムズだが、この時は何も知らない。

... The fact is, God has not left us without guidance. How, otherwise, could our Lord have given us the high command "Be ye therefore perfect"? Mettthew five forty-eight. ... A brief in Original Sin should not lead us to probe the filth of our minds or regard ourselves as unique and interesting sinners. ... We know it from God's Word and from his Church with a certainty as great as our belief. Truthfulness is enjoined, the relief of suffering is enjoined, adultery is forbidden, sodomy is forbidden. And I feel that we ought to think quite simply of these matters, thus: truth is not glorious, it is just enjoined; sodomy is not disgusting, it is just forbidden. ... (*The Bell*, 131-132)

この時点では、ジェイムズは何の気なしに言っているのだが、そばで聞いているマイケルには耳に痛い言葉であるに違いない。マイケルを、ジェイムズの言う「男色は、ただただ禁じられている行為である」との言葉を例に挙げながら、マイケルの人物造形が複雑だと指摘するのは、バイアットである。マイケルがニックとのスキャンダルで厳しい立場に追い込まれたことがあったにもかかわらず、そうしたことを繰り返すことを、その理由としてあげている (*Byatt*, 105)。

ところが、ニックとの一件は、マイケルにとっては、あながち意味のない出来事ではなかった。マイケルの心の中には、人生の転機が訪れるその時まではインバー・コートに足を踏み入れてはならないという戒めがあった。元々、聖職者になることを考えていたマイケルが、彼の一族の所有のインバー・コートを訪れるに時間がかかったいるのは、ある意味、皮肉なことだったのかもしれない。運命が彼に二度目の過ちを犯すことを待っていたと言えるかもしれない。インバー・コートという先祖から受け継いだ場所に、とうとう訪れることになった彼が犯した罪は、すんでのところトビーへのキスだけで終わる。ただし、この事件は、マイケルに、彼とニックとのわだかまりが未だ消えていないことを自覚させる。そして、ニックは自殺をとげる。多くの批評家が、マイケルとニックとは最後まで互いに心が通じ合うことなく終わったと指摘している。

マイケルは聖なる世界に向かうことを求めながら、いつも俗なる世界にいる自分を見出してきた。最後になって、彼はやっと彼の向かうべき場所を見つけたのかもしれない。先祖から受け継いだインバー・コートを修道院の手に委ねることで、彼は本来の聖なる世界ではないが、俗なるところがあっても彼にとっては聖なる世界を意味する場所に向かうことができたのである。

### 結論にかえて ドーラにとっての俗と マイケルにとっての聖

最後に、アン・ロウの『鐘』についての次の解釈を紹介する。

*The Bell* (1958) is the first novel where Murdoch's ambivalent feelings about

Christianity are expressed in any detail and where her own developing 'neo-theology' is tested. (Anne Rowe, 64)

ドーラは、夫ポールを媒介して、インバー・コートにやって来る。しかし、彼女は三度、ポールの元を去るという行為に出る。これが、彼女の成長のきっかけを与えることとなる。特に、ドーラにとって大きな転機となるのは、彼女が発作的にロンドンに戻り、彼女が何度も足を運んだことのあるナショナル・ギャラリーを訪れ、そこで見たゲインズバラの絵画から啓示を受けるというエピソードである。

... Dora stopped as last in front of Gainsborough's picture of his two daughters. These children step through a wood hand in hand, their garments shimmering, their eyes serious and dark, their two pale heads, round full buds, like yet unlike.

... But the pictures were something real outside herself, which spoke to her kindly and yet in sovereign tones, something superior and good whose presence destroyed the dreary trance-like solipsism of her earlier mood. When the world had seemed to be subjective it had seemed to be without interest or value. But now there was something else in it after all. (*The Bell*, 190-191)

ドーラの得た啓示は、この引用の中に現われている。ドーラは、セックスを含めて、ポールとの結びつきが何か実体のないもののように感じていた。そのドーラが、ロンドンのナショナル・ギャラリーで、ゲインズバラの絵を見て、

自分の殻に閉じこもってはいはだめだという啓示を受ける。マードックは、それを独我論からの脱却としているが、これは、ドーラが、彼女と夫ポールとの関係を見直すことを求められたとの啓示に他ならない。ドーラは最後になって、宗教的な空気に合わないと思われていた自己の中に、聖なるものを見出したのでないだろうか。これは、ドーラが、聖なる世界に足を踏み入れることにより、最後に夫の別れを選択するという一連の流れを作り出している。このように、彼女にとっての俗なる世界は、聖なる世界に身を置いて初めて違った形で彼女の前に提示される。

一方、マイケルは、ニックとの一件のあと、彼の歩むべき人生の道を踏み外したようになっていた。しかし、彼の場合も、インバー・コートが彼の人生を変える働きをする。先祖から受け継いだこの宗教的な雰囲気のある場所があったからこそ、マイケルは彼自身の宗教性を目覚めさせて、彼の変貌のきっかけとなったのであろう。しかし、マイケルの場合、ニックの自殺という負の遺産を生んでしまう。マイケルには、何か弱々しげな雰囲気が付きまとう。マイケルの場合、いつも聖なる領域へのあこがれがある中でその行動は俗につながるものであった。つまり、マイケルの聖なる世界はいつも俗なる世界の一部として存在している。

リーソンによれば、マイケルが同性愛者としての振る舞いを封印できないのも、ドーラがポールとの関係の中で自身に価値を見いだせないのも、ジェイムズが異なる価値観を受け入れることができないのも、『鐘』という作品の弱さと指摘しているが、それこそがマードックが描こうとした主題であったとしている (*Leeson*, 103)。つまりは、それは、ドーラの場合、ポールの元を去って絵画の道に戻ることが最善の道であることを認識することであるし、マイケル

の場合は、ニックを自殺に追いやることで自身の無力さを自覚させて、最後はインバー・コートに集った人々が離散した後で、その場の後始末をする役割を担わせることであった。

アン・ロウが言うように、この作品はアイリス・マードックによる新しいキリスト教観の表明であるのかもしれない。

### 註釈

- 1) A. S. Byatt. *Degrees of Freedom the Early Novels of Iris Murdoch*. (Vintage Random House, 1994) 86 以後、この批評からの引用は末尾に筆者と頁数のみを記すこととする。
- 2) Hilda D Spear. *Iris Murdoch*. (New York: PALGRAVE MACMILLAN, 2007) 27-8 以後、この批評からの引用は末尾に筆者と頁数のみを記すこととする。
- 3) Iris Murdoch. *The Bell* (Vintage Random House, 1999.) 11 以後、この作品からの引用は末尾に頁数のみを記すこととする。
- 4) Anne Rowe. *IRIS MURDOCH*. (Northcote House Publishers Ltd, 2019.) 4 以後、この批評からの引用は末尾に筆者と頁数のみを記すこととする。
- 5) Elizabeth Dipple. *IRIS MURDOCH Work for the Spirit*. (The Univ. of Chicago Press, 1982.) 251-252 以後、この批評からの引用は末尾に筆者と頁数のみを記すこととする。
- 6) Miles Leeson. *Iris Murdoch: Philosophical Novelist*. (Continuum International Publishing Group, 2010.) 81 以後、この批評からの引用は末尾に筆者と頁数のみを記すこととする。

### 参考文献

- Bove, Cheryl K. *Understanding Iris Murdoch*. Univ. of South Carolina Press, 1993.
- Byatt, A. S. *Degrees of Freedom the Early Novels of Iris Murdoch*. Vintage Random House, 1994.
- Conradi, Peter J. *The Saint and the Artist a Study of the Fiction of Iris Murdoch*. Harper Collins Publishers, 2001.
- Dipple, Elizabeth. *IRIS MURDOCH Work for the*

*Spirit*. The Univ. of Chicago Press, 1982.

Hawkins, Peter S. *The Language of Grace Flannery O'Conner, Walker Percy, and Iris Murdoch*. Church Publishing Incorporated, 2004.

Leeson, Miles. *Iris Murdoch: Philosophical Novelist*. Continuum International Publishing Group, 2010.

Rowe, Anne. *IRIS MURDOCH*. Northcote House Publishers Ltd, 2019.

Spear, Hilda D. *Iris Murdoch*. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.

Todd, Richard. *IRIS MURDOCH*. Methuen & Co., 1984.

White, Frances. *Becoming Iris Murdoch*. Kingston University Press, 2014.

### 作品

Murdoch, Iris. *The Bell*. Vintage Random House, 1999.

*Abstract*

## Holiness and Secularity in *The Bell* — through Dora Greenfield and Michael Meade —

Yasushi NAKAKUBO

This paper is about the holiness and secularity in Iris Murdoch's *The Bell*. This novel has two main characters, called Dora Greenfield and Michael Meade. They struggle to find what they want in their own life. One of the remarkable scenes is for Dora to leave London for the sake of her husband, Paul. At the beginning of this story, Dora is thinking how insufficient her understanding of Paul was.

Dora, our heroin is disappointed to see Paul at Imber Court. At first glance of the place, she feels she has entered a place with the atmosphere of holiness unfamiliar with her. Dora is gradually accustomed to the world of holiness while she knows she should be in a world of secularity.

Michael is fascinated with the world of holiness, but the grace of God leaves him. His homosexual tendency has prevented himself from being a priest although he has considered a life plan to be someone who is devoted to God. Michael's family has been keeping an estate at Imber Court for ages. Using the place surrounded by a religious atmosphere for people in need is his final challenge. It is unfortunate that he gets involved in some incidents such as a reunion of Nick Fawley and a suicide attempt from his sister. He never enters any world of holiness.

When I write this paper, I intentionally refer to more updated critical resources. In 2019, Anne Rowe published a comprehensive and challenging book titled *Iris Murdoch*. She has had some attempts towards researchers in the 21<sup>st</sup> century, saying Murdoch's private life is revealed, and critics have come to question Murdoch's bisexual tendencies. At the same time, some other references such as A. S. Byatt's and Hilda Spear's critiques are helpful and suggestive.

Dora moves from the "secularity" to the "holiness." On the other hand, Michael moves back and forth between the "secularity" to the "holiness." Our heroin finally acquires what she is supposed to meet with, and realizes she should leave Paul. Unfortunately, another key person never reaches what he thinks is an ideal life. Michael believes there is a God, but he doesn't believe in God. He is a complicated person.

To sum up, there is one suggestion from Anne Rowe's *Iris Murdoch*. Michael Meade is towards a new Christianity. This also might be what the author wants to describe in *The Bell*.

Key words : holiness, secularity, Christianity